

総合的な視点に基づいた児童英語指導法に関する研究 — 英語を専科としない学生による積極的かつ専門的アプローチをめざして —

竹下 裕子・村上 哲朗・柳沢 昌義・森 眞理・鈴木 夏実

キーワード：文部科学省 講義 ワークショップ 総合的な学習の時間 身体 運動
英語 指導法 子ども 絵本 文化 異文化理解
Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology
lecture workshop integrated syudies body athletics English
teaching method children picturebook culture
intercultural understanding

1. 序論

文部科学省は、平成 14 年度（2002 年度）、新学習指導要領の施行に際して、小学校に総合的な学習の時間を導入し、国際理解教育と称して英語活動を奨励し始めた¹。平成 17 年（2005 年）8 月、初等中等教育における国際教育推進検討会の審議を経て文部科学省初等中等教育局国際教育課がまとめた『初等中等教育国際教育推進検討会報告 — 国際社会を生きる人材を育成するために』²においても、日本国内外の国際化した社会に生きる子どもたちの育成のための国際（理解）教育には、教科等と「総合的な学習の時間」の両方の場で取り組むことができるが、いずれの場合にも、教科等における学習と「総合的な学習の時間」の関連を常に意識するなど、授業に広がりや深まりをもたらすことが重要であるとしている³。総

¹ ただし文部科学省は、小学校学習指導要領（平成 10 年告知、平成 14 年施行、平成 15 年一部改正）において、他の教科については詳細な学習指導内容を示しているのに対して、総合的な学習の時間は第 1 章〔総則〕第 3〔総合的な学習の時間の取扱い〕において「各学校は、地域や学校、児童の実態等に応じて、横断的・総合的な学習や児童の興味・関心等に基づく学習など創意工夫を生かした教育活動を行うものとする」という抽象的な指導をしているにすぎない。英語活動への内容的な言及は、次のもののみである。「5 総合的な学習の時間の学習活動を行うに当たっては、次の事項に配慮するものとする。〈中略〉（3）国際理解に関する学習の一環としての外国語会話等を行うときは、学校の実態等に応じ、児童が外国語に触れたり、外国の生活や文化などに慣れ親しんだりするなど小学校段階にふさわしい体験的な学習が行われるようにすること。」

< http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/youryou/main4_a2.htm >

² 文部科学省初等中等教育局国際教育課 < http://www.mext.go.jp/b_menu/public/2005/05080101/all.pdf >

³ 文部科学省初等中等教育局国際教育課、前掲報告書、7 頁。

合的な学習の時間においては、「国際理解、情報、環境、福祉・健康などの横断的・総合的な課題、児童の興味・関心に基づく課題、地域や学校の特色に応じた課題などについて、学校の実態に応じた学習活動」⁴が望まれてきたが、総合的な学習の時間と英語活動の関わりは、他の課題以上に密接である。

加えて、文部科学省は小学校における本格的な教科としての英語指導の導入に対しても積極的な姿勢を示してきた。平成 15 年（2003 年度）3 月、「『英語が使える日本人』の育成のための行動計画」を策定し、その目的のひとつに小学校の英会話活動の支援を掲げた⁵。平成 15 年度、英語活動を行っている小学校では、総授業数の 63 %に外国語指導助手（ALT）⁶が、また 12 %に英語に堪能な地域人材が参加し、0.7 %に中・高等学校の英語教員が参加した。平成 16 年度（2004 年度）、外国語指導助手の割合は伸びず、中・高等学校の英語教員の参加は 0.6 %に下がったものの、地域人材の参加は 17 %にまで増加した⁷。また、小学校における英語活動の支援の一環として文部科学省が設置した研究開発学校制度のもと、平成 15 年度には 67 校⁸が、平成 16 年度には 71 校⁹がその指定を受け、英語教育に関する研究を実施している。

これに伴い、就学前児童の保護者の間に、子どもに対する英語指導の関心が高まっている。子どもを対象とした民間の英語教室や学習塾の増加、書店に並ぶおびただしい数の子ども向けの英語教材、子どものための英語学習を目的としたテレビ番組の放映などは、その傾向を示す事象の一部にすぎない。アジアの ESL の国々¹⁰のみならず、EIL の国々¹¹においてさえ、小学校における英語指導が本格化して久しい現状において、日本の小学校における英語の扱いに対する関心、あるいは子ども一般と英語の関係に対する関心がますます高まっているのである。

⁴ 文部科学省「小学校学習指導要領」第 1 章第 3。

⁵ 「総合的な学習の時間などにおいて英会話活動を行っている小学校について、その実施回数の 3 分の 1 程度は、外国人教員、英語に堪能な者又は中学校等の英語教員による指導を行う」ことを行動計画の目標としている。

⁶ ALT は Assistant Language Teacher のことであり、外国語（英語）指導助手の通称として用いられている。

⁷ 文部科学省、2005 年、20 頁。

⁸ 複数校が連携して取り組んでいる場合があるため、取組としては 20 件。

⁹ 同じく取組としては 23 件。

¹⁰ English as a Second Language、すなわち英語を公用語あるいは第二言語とする国々。シンガポールやマレーシアがこれにあたる。

¹¹ English as an International Language、すなわち英語を国内のコミュニケーションのための言語としてではなく、母語を共有しない人々との国際的なコミュニケーションのための言語として用いる国々。韓国、台湾、タイ、インドネシアなどがこれにあたる。

このような状況のもと、平成 16 年度、横浜市教育委員会が本学に対して、小学校における英語活動の支援を求めるために「英語教育サポーター」の送り出しを要請した¹²。これに応え、本学は平成 16 年度に「英語が堪能で、子どもが好きな」学生を、平成 17 年度には「英語と子どもが好き」で「教育にも関心がある」学生を募った。平成 16 年度には 22 名の応募者のうちの 9 名を、平成 17 年度には 20 名の応募者のうちの 16 名を、英語教育サポーターに選抜した¹³。両年とも、選抜された学生の多くが 1 ヶ月から 12 年（誕生から 12 歳まで）の海外生活経験者であった。

しかし、私たちは、「英語に堪能であること」「子どもが好きなこと」「教育に関心があること」そして「海外生活の経験があること」が優れた英語教育サポーターの定義には不十分であると考えている。中・高等学校の英語教員、小学校の学級担任、幼稚園教諭や保育士、そして TOEFL や TOEIC などの英語能力試験において高得点をあげた者のうちのどれをとっても、単独では小学校の教育現場で必ずしも英語指導者として円滑に機能するとは限らないからである。

そこで私たちは、英語を専科とする学生をもたない本学のカリキュラムにおいて、子どもに英語を教えるということを体系的に考え、対象学生を指導する方法を模索した。英語の運用能力が高いだけではなく、子どもとは何か、年齢・学齢に応じた子どもの発達と知識の習得状況はいかなるものか、どのような教材・教具を通じた英語の導入を行うのがふさわしいのかなど、子どもに関わるいくつかの視点から、総合的に幼児・児童に対する英語指導を考えることが必要であると考えたからであった。従って、「総合的な視点に基づいた児童英語指導法に関する研究 ―英語を専科としない学生による積極的かつ専門的アプローチをめざして」という共同プロジェクトを通じて、本学にふさわしい、子どもを対象とした英語指導者の育成とその方法の研究を開始するにいたった。よって本稿は、このプロジェクトの一環としての選択英語Ⅵ「子どもたちと英語」の授業運営を中心に、進行中であるプロジェクトの中間報告を行うとともに、今後のプロジェクトの方向性と課題を明らかにし、将来的な社会への有能な英語指導者の送り出しの可能性を求めつつ、次年度以降に向けた有意義な授業運営への提案も行うことを目的とする。

¹² 横浜市は、地域の教育力の活用方策のひとつとして、学校における教科での支援として、英語においては「英語教育サポーター」を設置している。詳しくは横浜市教育委員会発行『地域と学校の連携ハンドブック（ボランティア用）―地域の子どもの育てよう！学校支援ボランティアと教職員が力を合わせて』
< http://www.city.yokohama.jp/me/kyoiku/topics/pdf/160428_1.pdf >

¹³ 平成 17 年度に選抜された 16 名のうち 6 名は、前年度からの継続応募・継続選抜者である。

2. 「総合的な視点に基づいた児童英語指導法に関する研究 — 英語を専科としない学生による積極的かつ専門的アプローチをめざして —」と「選択英語Ⅵ（子どもたちと英語）」の概要

「総合的な視点に基づいた児童英語指導法に関する研究 — 英語を専科としない学生による積極的かつ専門的アプローチをめざして —」（以下、「本プロジェクト」）は、平成 17 年度の高等教育研究改革推進経費を申請し¹⁴、17 年 4 月 1 日に開始した。上述の課題を追求するために、本学内外の専門を異にする教員がその専門知識と経験を共有し、本学が携わるにふさわしい幼児・児童のための英語指導法を模索し、同時にそのような学生を対象とする教員のための指導方法を確立することを主な目的とした。

具体的には、英語教育、幼児英語教育、小学校英語教育、幼児教育、障害児教育、健康科学、情報教育、異文化理解教育などを専門とする教員が協働してそれぞれの視点から子どもに英語を教えるという課題に取り組み、選択英語Ⅵ「子どもたちと英語」の授業運営に携わり、知識と認識を共有し、フィードバックを与え合うなどの活動を通じて、本プロジェクトを進めている。本プロジェクト担当者は、竹下裕子、太田良子（以上、英語教育）、鈴木夏実¹⁵（幼児英語教育および異文化理解教育）、久埜百合¹⁶（小学校英語教育）、森眞理（幼児教育）、平田幸宏（障害児教育）、村上哲朗（健康科学）、柳沢昌義（情報教育）、鈴木有香¹⁷（異文化理解教育）である¹⁸。また本プロジェクトの担当者は、学内あるいは国内の状況のみを勘案するのみならず、前述のとおり、日本に先駆けて小学校における英語指導の試みが実施されているアジアの他の国の教育現場を視察することにより、より大きな成果をあげる努力を試みている。

本プロジェクトには、経常費補助金 200 万円が充てられている。その内訳は、消耗品費 90 万円、用品費 27 万円、印刷費 15 万円、郵便費 5 千円、業務出張費 7 万円、海外出張費 40 万円、支払報酬 20 万 5 千円である。補助金によって購入された書籍、文具、コンピュータソフトなどはプロジェクト担当教員のみならず、選択英語Ⅵ「子どもたちと英語」の履修者とも共有することにより、最大限の活用が行われている。

選択英語Ⅵ「子どもたちと英語」は、平成 17 年度前期に開講され、本プロジェクトに携

¹⁴ 平成 17 年度新規項目として、100 %の傾斜率で補助を受ける旨、文部科学省口頭教育局私学部私学助成課より通達を受けている。

¹⁵ 本学学部および生涯学習センター非常勤講師。

¹⁶ 中部学院大学客員教授、千葉大学教育学部非常勤講師および小学校英語教育学会副会長。

¹⁷ 亜細亜大学非常勤講師。

¹⁸ 本稿の執筆は、本プロジェクト担当者の一部のみが担当した。

わる教員全員が担当した。履修者は38名であり、その内訳は、人間科学科の学生10名、人間福祉学科の学生9名、そして国際社会学科の学生19名であった。毎回の授業に全担当者が出席したわけではなかったが、授業終了後、速やかに授業記録が作成され、全担当者がその内容を共有し、授業の進行を滞りなく把握した。この講座の特徴のひとつは、講義とワークショップを組み合わせて展開されたことである。プロジェクト担当者がそれぞれの視点から講義を行うのみならず、それを受けた学生が、英語を指導する立場と指導される立場の両方に立ち、ワークショップを通じて英語指導の実践を体験することができたのである。

講義とワークショップの主な内容は以下のとおりである。

1. 履修指導（森・竹下）
2. 講義：イギリスの童話と子どもたち（太田・竹下）
3. ワークショップ：英語の絵本の読み聞かせ（竹下・森）
4. 講義：幼児のための英語指導（鈴木夏実・竹下）
5. ワークショップ：幼児のための英語指導 ― 幼児に効果的な英語レッスンとは（鈴木夏実・森）
6. 講義とワークショップ：身体運動と英語（村上・竹下）
7. 講義：表現活動と英語（平田・森）
8. ワークショップ：英語による表現活動（平田・竹下）
9. 講義とワークショップ：異文化理解のための英語[1]（鈴木有香・森）
10. 講義：小学校の英語指導（九埜百合・竹下）
11. 講義とワークショップ：英語指導とコンピュータ（柳沢・竹下）
12. 講義とワークショップ：異文化理解のための英語[2]（鈴木夏実・森）
13. 講義：課題指導（竹下）

学生はまた、講義から得た知識とワークショップから体感したことをもとに、自由に課題を設定し、子どもに英語を教えることに関わるさまざまな活動を行った。学生が取り組んだ研究課題は、子どもに英語を教えるための教材・教具の作成、教案の作成、市販の英語教材の評価、子ども向けに放映されているテレビ番組の評価と提案、英語指導を目的としたIT教材の研究、民間の英語教室などの視察と評価、英語指導を実施している幼稚園などの視察と評価など、多岐にわたり、それぞれが教える立場と教わる立場から、柔軟で独創的な視点を示すものであった。

3. 「総合的な視点に基づいた児童英語指導法に関する研究 — 英語を専科としない学生による積極的かつ専門的アプローチをめざして —」におけるいくつかの視点

子どもに関わる多角的な視点から、総合的に幼児・児童に対する英語指導を考えることを目標とする本プロジェクトの試みの一部を以下に示し、その成果と今後の課題を明らかにする。試みは広範囲にわたるため、本稿では特に「子ども・英語」「子ども・絵本・英語」「子ども・身体運動・英語」「子ども・IT」そして「異文化・子ども」という括りに限り、プロジェクトの内容を明らかにし、その他の視点による考察は別の機会に譲ることとする。

3.1 幼児のための英語指導

一般に、児童英語教育研修における英語指導法の授業は、将来的に児童に関わることを前提とし、幼児に対する知識と関心を持ち、幼児教育、英語学、教育学、教授法のいずれかを専攻している学生を対象にした通年の講座が常であるのに対して、本講座の履修学生の全員が英語を専科とせず、一部が幼稚園教諭および保育士をめざすにすぎないという集団である。従って本項では、そのような学生に対する新しい試みとして、「幼児のための英語指導法」という授業を実践するにあたり、幼児英語教育に関する背景知識の乏しい学生を対象とした英語指導法授業のあり方、および有効性と発展性を考察する。

3.1.1 履修学生に適した「子どもと英語」の指導

外国語を指導する教員に求められる資質は幅広く、子どもを対象とする場合、児童心理学、言語学、教育学、音声学、異文化コミュニケーションの知識とその実践的なスキルが求められる。本講座の履修学生は、児童英語教育に関する知識が不足しているのみならず、児童英語教員としての適性が未確認の状態であった。現場の児童英語教員に対する研修であれば有効であろうと思われる専門分野の書籍や講義による指導の効果は期待できず、専門性の高い教授法の理論と実践を講義しても、消化できる段階にはないと判断した。

従って、経験や既習の知識から発想することによる、先入観や偏見を持たず柔軟な学生に有効な授業形態と内容を実施することを模索し、①幼児に接する際の児童英語教育に関する知識の重要性を発見し、②英語ならびに教育学に関する学習の必要性を自覚し、③児童英語教育への興味または従事への動機づけとなるような能動的な講義内容を工夫した。履修学生の多くが児童心理に関する知識を持たず、また大半は、子どもへの興味、英語を教えることへの興味などで履修を決定したと仮定し、学生の「子どもに英語を教える」ことへの認識度を探るため、「子ども」「英語」「教える」という3つの観点から問いかけることから講義を開始した。

3.1.2 「子ども」を理解する段階

少子化、核家族化傾向の中で、履修学生の多くは「子ども」を知識として理解しているのみで、その存在を体感しているとは言えなかった。授業開始時、幼児たちとの接触や交流が稀有な学生には「子ども」の具体像を定めることが困難であり、「子どもとは何か」という議論においても、表面的な意見を述べるにとどまっていた。そこで、安易な内容や非効率的な指導に陥らないためには、幼児についての知識と理解が英語指導法以前に重要であることを確認した。

果たして、討議とワークショップを経た学生は、次のような実感を伴う具体的な表現を用いて、それぞれの「子ども」像を明らかにすることが可能となった¹⁹。

大人の養育や愛情が必要な子ども、親から自立していない / 豊かな感情、表現力、行動力、好奇心、冒険心、恐怖心を兼ね備えている / 新しいものに敏感で何でも直ぐに吸収できるやわらかい頭をもっている / 自分で英語を学びたい!とは思っているわけではない / 母語を日本語と理解している / 団体行動は、5、6歳にならなければならない / 感情を素直に表現するので、つまらないことはやらない / お母さんが大好き / 音楽がなると、歌詞が分からなくてもリズムに合わせて体を動かせる / 友達と競い合ったり、奪い合ったりすることがある / 自分の好きなものを見せて歩いてコミュニケーションをとる。

さらに、子どもの行動を観察した結果、子どもの可能性が予想以上であったことを発見したことに對する驚きを表した学生が目立った。以下は、実際に講義、体験、調べなどを経たからこそ表すことができた、学生による貴重な考察である²⁰。

大人にはない行動や考え方ができる / 感情をありのままに発言することができる / 好きなことや楽しいことはいつまでも何度でも繰り返し続けることができる / 親と一緒に安心した環境であれば、子どもたちにできないことはないと思う / 与えられた環境の中で楽しむことができる / 見えたものをそのまま純粋に受けとめる / 可能性は無限大だと思う / 英語を言語として受け入れられる / じっとしていられない / 気持ちの抑制ができない / 長時間座っていられない / 自分のことだけで精一杯 / 吸収するのも早い、忘れるのも早い / ひとつのことを長時間できない

¹⁹ 授業後回収したレポートから、設問「子どもたちとは、誰のこと?」に対する回答の抜粋。

²⁰ 授業後回収したレポートから、設問「子どもたちにできること」「子どもたちにできないこと」に対する回答の抜粋。

3.1.3 「英語」を理解する段階

幼児に教えるべき「英語」の有り様の解釈を確認しようとした際、各自の中学・高校での英語経験、テレビや書籍、留学経験など、幼児時代のものではない経験への言及が多かったことは、学生の戸惑いの表れであった。そこで、大人を対象にした英語指導との比較において、子どもを対象とした英語指導では、①扱う「英語」に対する、より一層の配慮が必要であり、②与えられた英語や指導法を機械的に実施するのではなく、その妥当性の判断に責任を負い、③その判断を、知育、語学習得など多面的かつ総合的見地から行ない、④子どもの将来にわたる英語学習生活への影響を慎重に考慮し、⑤子ども英語教員はそれに対応できるだけの英語力をつけなければならないことを、討議を通して確認した。日常生活における英語の位置づけ、日本語以外の言語の役割、対象外国語が英語に集中している理由、そして他国で使用されている英語については、授業内で触れることができなかったため、参考資料を配布²¹し、更なる考察を促した。

3.1.4 「教える」を理解する段階

「教える」の段階では、先に実施した「子ども」と「英語」についての討議を経て、対象者や使用言語に対しての認識が確立していたため、子どもに英語を教える際には、子どもの発達やそれぞれの性格を知った上で指導法や教材を選択し、英語を教えるべきであるという意見が無理なく出されたことは興味深い。幼児対象の英語授業では、習得を期待するのではなく、彼らが安心して楽しむことを最優先することの重要性や、子どもが初めて正式に英語に触れる場面で、英語を紹介する立場にいる教員の責任を学生たちが認識し始めたことが伺える。興味深い意見として、以下を特記する。

小さな子と一緒にいると、こちらの可能性が広がる気がした / 英語と日本語と実態（意味）を結びつけながら指導していくべきだと思う / 分からなくても体いっぱい英語を話せば、きっと自然と英語が身につく / 口で言ってもなかなか理解するのが難しいので、音楽をつけて体で表現すれば興味もわくし、楽しく学べると思う / 教えるというよりも触れさせるということを目指していくと良いと思う / 英語という以前に子どもたちの興味をこちら側に向けなければならないと思う / 安心して遊びや活動に集中できる環境を確保することが幼児に英語を教える上で大切である

²¹ 中山編、2001年、3頁～10頁。

加えて、複数の学生が「母親の存在の大きさ」を指摘していることから、信頼のおける人と共に楽しく時を過ごすことが、英語導入期において効果的な方法であることを、学生たちは短時間の講義とワークショップ学習で体得したことがわかる。

教室や授業実施場所の広さや設営状況、指導者数、音や音響施設の大切さも多くの学生が指摘している。子どもが集中し、活発に活動するために最適な環境づくりこそ、第一に考慮しなければならない項目である。子どもが楽しむのみならず、指導者も共に楽しむことの必要性への言及も興味深い。教員から生徒への一方向、上下関係は効果的でなく、教えることに執着せず、むしろ楽しみを共有する姿勢が必要であるという意見である。

「ワークショップ：幼児のための英語指導」では、実際に幼児と共に時間を過ごすことにより²²、より実践的な分析が可能であった。実際の子どもの反応や行動様式を体験する良い機会になり、次のとおりの反応があった。

予想以上に大変だった。実際に授業を作り上げるのは、今日以上にもっと大変なのだった / 英語を使わなければ”と妙に緊張してしまった / 子どもたちがこんなにも「英語」として理解していることにびっくりした / 圧倒されることばかりだった / 子ども一人ひとりが違う反応を示し、(中には) 興味のなさそうな子に興味を持たせるようにするのはとても難しいことだと思った / 時間が長く感じた。子どもたちと共にいると時間の流れや過ごし方が違うからだと思った / 指導側の準備が大切だと感じた

さらに、楽しい授業を提供することができ、楽しみを共有することのできる教員になりたいという、指導者としての責任と決意を述べた者もいる。その他、英語学習の必要性を再確認した者も多い。講義の段階では、「子ども」を具体的に捉えることができなかった学生が、2、3歳児との活動を通して、非常に正確で活発な反応を示した。実生活で子どもと触れ合う機会の少ない学生にとって、このような体験学習がいかに効果的であることを証明するに至った。

3.1.5 考察：

講義とワークショップの連続の授業により、開始時には漠然としていた「子どもへの英語指導」を具体化し分析する視点を各学生に与えることができた。子どもたちとの交流により、

²² 5月27日、本学生涯学習センターで鈴木夏実が担当している「親子で英会話レッスン」の6組の親子(2歳児とその母親)と英語で遊ぶという内容を含んだ。

实际的で具体的な授業へと変化・発展させることができた。さらに、体験学習の導入で、短時間でも体得できる範囲の広さと、具体化度の高さを確認した。それは、多くの学生が、子どもを英語に触れさせる時期とその方法の大切さ、そしてその意義を挙げていることからわかった。漠然とした興味で受講し始めた現実感のない学生に対し、抽象的ではあるが現実化されうる課題を、講義のみならず、ディスカッションを重視し、実践演習で確認するという授業形態の有効性が証明された。学生たちの吸収力と柔軟性は予想以上であり、授業形態の効果を確認することができたことは大きな収穫である。学生の英語教育への関与の自覚を促し、より一層の英語学習への動機づけとなったと考える。

「幼児のための英語指導」の時間は、その時間数と履修学生の背景により、気づきの段階、基本情報の提供の段階に留まった。例えば、幼児への英語指導においては、学習目標、授業実施時の考慮点と方法、カリキュラムの必要性和作成方法、授業環境や学習時間、そして発達段階に見合った言語材料の選定法と活用法等の専門的かつ具体的な項目を扱うまでには至らなかった。今回の実績を踏まえて、今後、理論と演習の時間を設定する必要性を強く感じた。今回の講座の成果として、学生たちの柔軟性、新しい内容を受け入れられる許容量や可能性を確信したことにより、より発展させた難易度の高い内容の講義が実現可能であると考ええる。

3.2 絵本と幼児一英語による絵本読み聞かせ授業の位置づけ

児童文学家である松居は絵本の大切さについて、「絵本とは、言葉が湧きでてくる世界です。子どもに生きている喜びを感じさせ、生きる力を与えます」²³と述べている。さらに松居は、人間の育ちの初めにことばがあることを「赤ちゃんは、言葉を飲み込み、食べる」と表現し、その中に「気持ちを（母親と）一緒に感じとります」²⁴と絵本の持つ特質について述べている。子どもと絵本の出会いは、多くの場合、母親の読み聞かせによるものであるが、読み手と聞き手が分かちあう活動であるという意味で、保育・教育施設における絵本の読み聞かせが重要であることは周知のとおりである。

また、絵本と子どもの研究者、佐々木は、絵本の本質をめぐりとともにストーリーが発展することであり、しかもめぐりを促すものは、あくまでも絵もしくは絵と文のリズムが引き起こす内的必然性によるものでなければならないと述べている²⁵。絵とことばが織りなす絵本の世界は、生活体験に近い現実の世界と、それとはかけ離れた虚の世界を、ページをめぐ

²³ 松居、2002年、7頁。

²⁴ 同上。

²⁵ 佐々木、1997年、39頁。

ることにより行き来しつつ、人間の感情のヒダや周囲の事象の複雑性を学び思いめぐらせることが可能な、人間形成の心の糧となる体験をもたらす世界なのである。

絵本は、絵や文の中に自分を映し出したり、見出したりするという、大変に身近な個人的体験であると同時に、世界を切り拓き、まだ見ぬ世界とのコミュニケーションへの窓口としての働きをもつという魅力も備えている。日本の社会文化的文脈から、世界の社会文化的文脈への遊泳体験を可能にするものとして絵本を位置づけることができるのである。

世界とのコミュニケーション・ツールとしての絵本は、ことに日本語を母語として、英語を第二言語として生活する子どもが、自分の居場所を見出す役割を果たすと同時に、英語の理解が不十分であっても構わないという安心感を抱かせる役割も果たすようである。この効果は、アメリカの幼稚園に子どもを通わせる日本人の保護者も認めている²⁶。教員や級友が話す英語が理解できない時でも、すでに日本語でなじみのある絵本が英語で読み聞かせられると、英語の音やことばの意味に興味を抱いていく様子があった、と保護者は語ったのである。

以下に、授業の流れを紹介する。なお、授業の進行と同時に、授業への評価反省を行ったため、当日の記録をもとに学生の反応に関する読み取りも記すこととする。

3.2.1 授業の流れから ― 授業の進行と学生の反応

A. 導入部

まず、英語に慣れ、英語による生活文化圏における就学前教保育・教育施設における子どもの英語体験に触れる目的で *Where is Thumbkin?* (「♪おとうさんゆびどこでしょ、ここよ、ここよ～」) の手遊びを導入とした。この活動において、子どもの生活や学びについて学ぶ機会を多く持っている人間科学科と人間福祉学科の学生には違和感を覚える表情はなく、担当教員と共に容易に手を動かしメロディを口ずさむ様子が見られたのに対して、国際社会学科の学生には、新しい体験に当惑し、はにかみながら臨む姿が見られた。子どもと英語の出会いに驚くというより、まずは子どもの世界という異文化との出会い体験への反応という様子であった。

学習動機を高めるための配慮として、英語の絵本を教室内に並べておいたので、履修学生はすぐにでも英語の絵本の読み聞かせを行うことを期待したかもしれない。しかしながら、英語で絵本を読み聞かせるにあたり、絵本の位置づけや捉え方を明らかにしておくことがまず大切であると考えたため、学生の子ども時代のふりかえりを促し、思い出を引き出しつつ、絵本の重要性についてともに考える時をもちながら、絵本の魅力や有効性、そして子どもの

²⁶ 森が1990年代後半、アメリカの日本人補習学校幼児部を担当した際、保護者と交した話に基づく。

発達の関係を講義した²⁷。

次に、英語による絵本の読み聞かせの実例として、子どもを対象にした民間の「英語の読み聞かせの会」を収録したDVDを視聴した²⁸。会の様子と担当教員による読み手へのインタビューを視聴する間、学生は、「すごい、子どもたち集中している」「(子どもたち)お行儀よい」「(読み手の声や抑揚が)はっきりしていてわかりやすい」などの感想を漏らしていた。明らかに、次の段階で学生自身が読み手となることを自覚しながらの視聴であった。とりわけ、読み手へのインタビューにおいて、①物語を完全に把握し、自分のものにすること、②表現豊かに演じるように読み聞かせること、③自分の声を録音するなどして、読み手としての自分の得手不得手を知ること、の3点が、読み聞かせ上達のこつであることが明らかにされたことが学生の参考となった。机上の空論ではなく、実際に読み聞かせの実践者の声を耳にしたことが説得力を増したようである。

B. 学生による英語の絵本読み聞かせの実体験

導入段階を経て、実際に絵本を手に取り、小グループによる読み聞かせを行った²⁹。使用した絵本は以下の通りであるが、一部、日本語版が出版されている絵本を参照可能とした³⁰。

David, Swimmy (『スイミー』)、*The Happy Day* (『はなをくんくん』)、*The Very Hungry Caterpillar* (『はらぺこのあおむし』)、*Where The Wild Things Are* (『かいじゅうたちのいるところ』)、*One-Inch Boy* (一寸法師)、*Peach Boy* (桃太郎)、*Bamboo Princes* (かぐや姫)

一冊に集中し、めぐりを丁寧に行う者、数冊を手に取り、読み聞かせに没頭する者、英語を読みながら日本語表現について話し合う者など、学生の体験方法は多様であった。

C. 体験の分かちあい

絵本の読み聞かせを体験し、体験に関する印象や気づきについて発表をした際の学生の反応には次のようなものが含まれていた。絵本の普遍性と文化の独自性、また翻訳のおもしろさと難しさ、絵本を通して文化を伝えることの難しさなど、ことばと文化の関連性を考える

²⁷ 子どもの本の童話館グループ発行『絵本のある子育て』より「ここに、こんなにかげがえのない親と子の宝があります」を配布資料とした。

²⁸ 神奈川県逗子市の逗子国際交流会が定期的に行っている「英語絵本の会」の講師でイギリス人の伏見エマ氏による読み聞かせ、および事後のインタビューを収録したもの。

²⁹ 主に2人1組で1冊を交互に読み聞かせる形式を採用した。

³⁰ 日本語による絵本のうち、授業で参照可能であったものを『 』内に示す。

機会をもち、体験を分かちあうことのできる貴重な時間であった。

絵本は英語であっても、絵本の面白さは変わらない（*The Very Hungry Caterpillar*『はらぺこのあおむし』から）／絵と呼応する言葉の持つリズムの面白さや楽しさが、英語の方がよりはっきりと読者に伝わった（*David* から）／英語の絵本は、いざ読み聞かせすると思ったより難しい（*Swimmy* から）／普段日本語で慣れている言葉が、英語ではどのように表現されているのか興味を抱いた／日本の物語の挿絵は、ステレオタイプのように思える。日本人以外の人はどうのような印象をもつのだろう

D. 授業のまとめ

授業における学びが単発で終わることなく、本講座の最終課題である個人の学習テーマと有機的なつながりを持たせる目的で以下を提示した。

- ① 実際の読み聞かせの画像と音声を収録して提出
- ② 幼稚園・保育所等などにおいて、子どもに読み聞かせを行う実践活動と省察
- ③ 教員に対する読み聞かせの実演
- ④ テーマに対する論文執筆
- ⑤ 英語絵本の作成

3.2.2 学生の声にみる英語による絵本読み聞かせの学び

読み聞かせの体験後、授業を振りかえった学生のレポートには真摯な学習態度が読み取れた。これを、知識・スキル・態度という教育の三側面に整理し、さらに、テーマごとに分類し、以下に示す。

A. 知識

学生のレポートには、①絵本の魅力と重要性、②子どもの発達と絵本、そして③絵本と文化に関する考察が見られた。

①「絵本の魅力と重要性」に関する学生の意見

絵本の魅力再発見：読むごとに違う感情を抱く、新しい発見にめぐり合える／絵本の奥深さや想像性が豊かになることを学んだ／普遍性（万国共通）：国が異なっても伝えたいことは同じ／絵本は、繰り返し楽しめる、子どものペースで読める、前のページに戻ることが可能

②「子どもの発達と絵本」に関する学生の意見

子どもの想像力や知恵を身につける / 一つ一つの言葉理解より内容理解が大切 / 日本語がまだ
という中で、混乱を生じるのではないだろうか / 母語理解の大切さ / 年齢によっても受け止め
方が異なるのではないか

③「絵本と文化」に関する学生の意見

日本語タイトルとの違いを知った (*The Happy Day* と『はなをくんくん』を比較して) / 翻訳
の仕方を意識した (ふとっちゃん、〇〇くん、はらぺこ) / 言語と文化の違いを感じた (特有
の表現がある)

以上の意見から、子どもに対する理解を深めることが、英語の絵本読み聞かせをする際の
大前提であることを履修学生が認識、あるいは再確認した様子が読み取れる。早期英語教育
を肯定する幼児対象の英語教室の広告等に見られる一般的概念に対して、疑問を呈している
ことも注目に値する。母語が不十分な段階における言語の混乱の可能性を案じ、また母語理
解の大切さを認識した学生は、早期英語教育を手放しで推進するのではなく、子どもの生活
や日本人としてのアイデンティティの確立を大切にする過程における望ましい英語体験と
いう課題を本講座の担当者に提示している。

それは同時に、英語と日本語の翻訳のあり方、すなわちことばの面白さや言いまわしが、
文化と密接な関係であるという気づきがあったことにも関係する。英語による絵本読み聞か
せは、子どもにとっても文化の学びであることを学生は体感している。

B. スキル

英語で読み聞かせる作業の過程で、読み聞かせのテクニックや教授法について考える学生
の姿が見られた。

①英語で読み聞かせのテクニックとしてのスキル

ページをめくる速さ加減 / 話し方の工夫 (アクセント、声のハリやテンション) が必要 / 音読
の大切さ: 発声・アクセント、発音の難しさ / 言葉を食べるように行う / 表情を考えながら読
み聞かせをする重要性

②教授法

フラッシュカードではなく物語を通すほうが効果的 / 先入観を見直す（英語の絵本というとアルファベットと思いがち） / 解説せずに、全体の流れを語る読み聞かせが大切 / 読み手の気持ちのみを押しつけない

上の学生の意見は、自らが子どもと向き合うことを想定したものである。自分が当事者として「英語による絵本読み聞かせ」を行うことを意識し、指導者として身につけておくべきことと、その場合の最善の方法へと思いを巡らせた様子が示された。

C. 姿勢

絵本の読み聞かせを行なう際の姿勢に関する意見も提示された。

一緒に楽しむ / 楽しさや面白さの共有 / 親子のコミュニケーションを活性化する媒体 / 学ぶとか教えるというより、絵本の世界を探索する / 読み手がまず絵本の世界を楽しむ / 学生の絵本を読んでいるときの笑顔を共有できたことがよかった

これらの学生の意見には、子どもに「教えてあげる」「読み聞かせてあげる」という態度ではなく、「教えあえる（コミュニケーションの活性化）」「共有する」ことが大切であるという理解し、学びを子どもとの共同作業として捉えていることを示している。

3.2.3 考察

講座の主旨、授業、事後の学生の意見と通じて、今後の課題と方向性を考察する。

A. 知識

講座の一環として、絵本の世界について学生に伝え、子どもに対する絵本の大切さを考えさせる時間を設けることが必要である。学生が将来、子どもに対する英語指導の実践において、機械的な英語の訓練者ではなく、活動の根底にある基本理論を学ぶ者として子どもの前に立つ必要があるからである。絵本の読み聞かせを通して、子どもとともに多様な文化を映し出す鏡や普遍性のある絵本の魅力に気づく機会を持たせなければならない。

その際、絵本の選択が重要となる。絵本選びは、選び手の価値観の表れである。英語体験をもつ子どもの多くは、多くの情報を絵から得るため、子どもと英語と絵本を考える際、異文化への気づきへの導き方と展開の仕方を、本講座の全てのテーマとの関わりの中で検討す

るべきである。

B. スキル

英語による絵本読み聞かせの当事者として学生が直面した課題は、効果的な読み聞かせの方法である。履修者は、英語を専科としない学生であるため、子どもへの読み聞かせに好ましい発音やイントネーションなどの技術を学ぶことも今後の課題である。それと同時に、感情表現、絵本の提示の仕方やページのめくり方など、絵本読み聞かせに固有のスキルに関する実践的な指導のあり方も検討するべきである。

C. 姿勢

学生は、幼児期体験を含む自らの学びの変遷を振り返りながら、学びを提供する者としての意識を高めていった。ある学生は授業の中で、「マザーグース、保育園の先生、祖父母、母親の顔が思い出された」と、自分の子ども時代を省察し、絵本体験の大切さを語った。子どもと英語の出会いと学びは、実体のない絵カード等で英語の語彙を増やし、ネイティブ・スピーカーに近い発音をするための訓練ではなく、体験すること、すなわち、子どもが英語絵本との出会い体験を多面的に構成することを必要とする。たとえば、あるテーマから派生するような多くの体験活動を可能にするプロジェクトアプローチ的活動の展開など、本講座の他のテーマ、および本講座以外の授業との連携のもと、子どもの英語の学びの有効性に関する理解を深めていくことが今後の課題である。

絵本は世界を知る窓口である。英語という世界を広げる言葉を絵本を通して体験することの大切さを思うことと同時に、担当教員と学生が共に、子どもと英語について「何を、どのように、なぜ」の視点を考慮しつつ、展開する必要性を今後も検討していきたいものである。

3.3 身体運動と英語

3.3.1 児童に対する英語指導における身体運動に関する英語の使用の意義

本項では、おもに児童に対する英語の指導法を、健康科学、とくに体育活動の立場から考察する。運動行動におけることばの果たす役割という観点を設定し、身体運動における英語の役割と、英語を用いる効果について考察を加えるものである。

身体運動には、スポーツ活動をはじめとして、ある目的に対して行われる人間の目的的な行動全てを含めることができるが、本プロジェクトでは、通常子どもたちが学校体育やスポーツ活動の場で行う運動行動として捉え、英語を使用した指導を試みた。生活スタイルが極めて欧米化した現在の日本人の生活の中には、多くの英単語をはじめとした外来語が定着し、違和感もなく使いこなされ、たとえば、「タオル」や「シャンプー」など、英単語を用いた方

がストレートに理解されやすい場合が多く見受けられる。また、普通名詞のみならず、「ビッグな」「シャープな」というような形容することばの多くにも英語が使われることが多い。とりわけ、数多く輸入されてきたスポーツを中心とした身体運動の動きそのものや全体を表すことばも例外ではなく、逆に英単語を用いた方が理解しやすいことが多いと考えられる。

具体的には、歩行運動や走運動というよりは、ウォーキングやジョギング・ランニングという表現の方が定着しており、伸展運動よりもストレッチング³¹というほうが、その内容をイメージしやすい。特に、瞬間的な動きを伴うことばは、キック、パス、シュート、キャッチ、ジャンプ等を、蹴る、渡す、蹴り入れる、受け取る、跳ぶなどというよりは直接動きに繋がっているのではないだろうか。それは、一度理解してから行動を起こすというような間接的なものではなく、直接神経系に作用する直接的な響きをもっているからであろう。このような例をとっても、身体運動にとって英語は、瞬間的に反応しなくてはならない身体の動きに対して、極めて作用しやすい信号を送るための有効な媒体としての機能をもっていると考えられる。以上のことから、児童に英語を指導するという課題において、身体運動との関わりから英語を使う有効性を提案するものである。

3.3.2 講義とワークショップ試みの方法

この試みは、平成 17 年 5 月、選択英語Ⅵ（子どもたちと英語）の履修学生 32 名を対象に、体育館において実施した。村上による講義をふまえ、ワークショップ部分として、運動指導を村上が、英語指導を竹下と鈴木夏実が担当した³²。実施した身体運動は以下のとおりである。

準備運動 / みんなでジャンケンポン / ウォーク・ランからグループづくり / ボールキャッチゲーム / フルーツバスケット / シェイプゲーム / だるまさん転んだ（英語版） / ドッジボール

³¹ ストレッチングは 1975 年にアメリカのボブ・アンダーソンによって全米に紹介された筋肉を伸展させる柔軟運動であるが、反動をつけずに姿勢を保持して行うスタティックストレッチングの他、現在では、リハビリを目的とした PNF ストレッチング（Proprioceptive Neuromuscular Facilitation 対角・らせん運動という運動パターンを行いながら筋肉や靱帯に刺激を与えて運動機能の回復を試みようとする治療手技）や動的なアクティブストレッチング、反動をつけて行うバリスティックストレッチング、ペアで行うペアストレッチングも紹介されている。（『フィジーク』、1995 年）

³² 各運動の指示や説明を村上の日本語と竹下の英語による同時二言語により行い、場面によって竹下、鈴木が英語のみで指示を行いながら進めた。

3.3.3 講義とワークショップの結果

講義とワークショップの終了後、①英語を使ったほうが動きやすいと感じた動作とその理由³³、②身体運動と英語全般の二点について、学生の意見を求めた。

①に対する学生の反応は以下のとおりである。

意外と身近にあることばが多い / 日本語だと命令調に聞こえるが英語だと動きやすい / 英語に対して適切な日本語が思い当たらない / 英語だと気持ちよく動ける / 外国生まれのスポーツ用語はそのままの方が正確で動きやすい / 瞬間的な表現には英語がわかりやすい / 指示的なことばは英語の方が理解しやすい / 英語の方が短く且つ正確に伝えられる / 音の響きに動きのイメージが被っている / 運動場面では短く表現することが多い / 反射的で簡潔で分かり易い / 小さい頃から日常的に使用されているから（小学生の頃から） / 習い始めから英語だったので自然に使っている / 審判の発することばとして聞き取りやすい

②身体運動と英語全般に関する学生の反応は以下の通りであった。

スポーツ用語に外来語が多いので自然に使える / 動きを伴うことで楽しく学べる（学ぶというより楽しむ感覚がある） / リズムがつけやすく発音が軽い / 子どもの頃から動作や動き、感覚と一緒に英語になじんでいく必要がある / ジャンケンポンは日本の方が使いやすい（リズム） / 英語を主体に運動を取り入れるのではなく、運動を主体にして英語を取り入れる / ことばに運動を合わせていくと窮屈、運動にことばがついて行く方が自然 / 色、果物、形等は耳と目同時に情報が入るとわかりやすい / 縄跳びの数や、体の部位を使ったゲームも有効 / 机上で発音して覚えるより身体を動かして覚える方が有効 / 体を使って覚えると日常生活と同じなので使いやすい / 多少ことばがわからなくても動作が入ることで壁がなくなる / 説明の入る動作にはぎこちなさを感じたが一方で動きながらの楽しさを感じた / スポーツや生活の中に英語が当たり前のように入っている

3.3.4 考察

まず、身体運動の中で英語を用いた方が動きやすいと感じられたものはどれも、「～を・・・

³³ 英語をつかったほうが動きやすいと感じた動作とその理由を考えるにあたり、対象とされるべき英単語は、ジャンプ、タッチ、キック、シュート、パス、スタート、ゴール、ファイト、アタック、レシーブ、トス、サーブ、ショット、ネット、ホップ、ゴー、ドリブル、マーク、アウト、セーフ、ストライク、ラスト、ナイスキャッチ、ナイス、ラッキー、チェンジ、グッド、スタート、パンチ、ダッシュ、ストップ、ターン、ラン、ストレッチ、トライ、ワン・ツー・スリーなどを想定した。

する」という、運動を具体的に説明する類のものというよりは、運動そのものや動作全体が表現されている短い表現であり、瞬間的に全体の動きを認知するのに有効であると感じられるものであったとされている。これは、身体運動における行動イメージは英語の方がつくりやすく、動きやすいということを示しているといえよう。また学生は、それらの運動に関わった当初から英語の単語やフレーズになじんでいるため、それらが意味することが、すでに運動習慣の中で動きと同化されているからであるといつてよいであろう。さらに、ことばの響きにもリズムやテンポが伴い、直感的であるという感覚に立って、たとえば審判員の発する判定のことばに対しても同様に感じているようである。一方、ジャンケンポンについては日本語の方がなじむと感じられたのは、そのリズムやテンポがワン・ツー・スリーと重なることに加え、すでに遊びや生活文化の中で、ことばの意味だけではない全体的な動作が染みついていて、ジャンケンポンという表現が、英語の運動用語と同じ感覚を与えているのではないだろうか。以上の例からも、ここでは、身体運動とことばはきわめて直感的に認知される関係にあることを理解し、細かい説明を必要としないスポーツ用語としての英語の有効性を明らかにすることができた。

正高³⁴は「そもそも幼い子ども達にとってことばを習得するということは、からだ全体（身体運動）をつかって覚える」ことであるとして、多様な種類の音の産出が特定の身体運動によって換気される感覚の介在が幼い子どものことばの習得に不可欠であるといえるほど、身体運動とことばの習得の重要性を提言している。また、日本語や外国語を超えて、発音されたことばの響きそのものに、物の大きさや形、堅さなどの特徴をイメージさせるものが内在している³⁵という。学生の反応に見られた「動きながらだと覚えやすい」「行動とことばを一致させて覚えていく」というものは、まさに、ことばをからだで覚えていくことを裏付けているものであろう。身体運動と英語の学びがその繰り返しの中で行われていくのなら、ことばが確実な情報となって理解され、行動という反応に表れるのであろうし、わざわざ日本語に変換して理解することは、まさに意味をもたないと言及ぶことができよう。

すでに、身体運動を含めたスポーツ用語の多くが、英語をはじめとする外来語であるが、あえて日本語に訳さず、原語のまま用いることの有効性はきわめて高いといえる。よって、英語を自然に学び、身につけるための指導方法のひとつとして、身体運動に英語を導入することは大いに効果的であると考えられる。加えて、基本的な用語といえる、体の部位や色、形、そしてその他の身体運動で使われる用語についても、ゲーム的な要素を含んだ多くの身体活動の中で覚えていくことにより、自然な習得が期待され、総じて特に幼児・児童に対する英語指導に

³⁴ 正高、2001年、94頁。

³⁵ 同上、93頁。

おける身体運動を用いることの効果と意義はきわめて大きいと考えることができる。

3.4 小学校英語と IT 活用

3.4.1 授業の目的と概要

「英語指導とコンピュータ」の講義とワークショップに基づき、本授業のねらいおよび実施方法について述べ、ワークショップ中に学生に対して与えた課題および授業終了後のアンケート調査の分析を通じて、小学校英語と情報教育について本学学生に教える教育方法論について論じる。

「英語指導とコンピュータ」の前週、日本で小学校英語の先駆的活動をしている久埜が「小学校の英語指導」を担当し、小学校における英語教育の略歴と実践方法について講義を行なった。履修学生はそれ以前、主として幼児のための英語教育に関する講義とワークショップを受けたのみであり、小学校に関する事前の知識を欠いていたため、文部科学省（旧文部省）³⁶の小学校における英語教育の方針やこれまでの試みに関する講義は難解であった。そこで、「英語教育とコンピュータ」では、小学校におけるコンピュータを利用した英語教育の実践事例を紹介する以前に、基礎知識として小学校英語教育に対する文部科学省（旧文部省）の取り組み、特に総合的な学習の時間に関する説明に講義の半分を割いた。また、将来、英語教育サポーターとして活動するためにも、他の国の事例を紹介することが本学の小学校英語教育の取り組みを理解する上でも重要であると筆者らは考えているため、小学校英語と情報化の双方において日本より先進的である韓国の小学校英語教育事情を紹介した。

図 3.1 に示すとおり、本授業を

1. 日本の小学校英語教育の取り組み

1. これまでの歴史 特に「総合的な学習の時間」

2. 事例紹介

2. 韓国の小学校英語教育

1. 韓国の英語事情

2. 事例紹介（Siheung 市 Gumbawi 小学校）

3. 韓国の英語用マルチメディアソフト

3. 幼児～小学生向けの英語マルチメディアソフト

1. マルチメディアソフトとは何か？

2. 教材体験

図 3.1 「英語指導とコンピュータ」の授業構成

³⁶旧文部省は平成 13 年 1 月の中央省庁再編に伴い、旧科学技術庁との統合により現在の文部科学省に至っているが、「総合的な学習の時間」を利用した国際理解教育の一環としての小学校における英語活動は、平成 10 年に告示され平成 14 年度より施行された学習指導要領に基づくため、本稿の観点のひとつである小学校における英語教育は、旧文部省と現文部科学省の双方が管轄した（する）部分をさしている。

3部構成とした。第一に、日本の小学校に教科としての英語教育を導入する必要性が論議³⁷される中、文部科学省(旧文部省)が国際理解教育を総合的な学習の時間に組み入れた経緯³⁸を講義した。また、日本で実践されているコンピュータを用いた小学校英語教育の事例を紹介した。第二に、韓国における小学校英語事情を講義した³⁹。これは柳沢が本プロジェクトの一環として、韓国 Gumbawi 小学校の英語の授業を参観した際に撮影したビデオや写真を多く用いて、学生にわかりやすく紹介した。第三に、日本で容易に入手可能な市販の英語学習マルチメディアソフトウェアおよび韓国全土で使用されている英語のデジタル教科書を、学生に数多く体験させた。

3.4.2 講義第一部：日本の小学校英語教育の取り組み

小学校における英語教育は、明治初期より制度化され実践されてきている⁴⁰が、このような網羅的歴史を紹介することは本講座の趣旨とかけ離れている。むしろ将来の教科としての「英語」が現実味を帯びてきたここ15年余りの歴史を学生に理解させ、なぜ教科としての「英語」の必要性が叫ばれているかを理解させるための略史が必要であると筆者は考え、大きく3つのステージに分けて解説した。

図3.2に示すとおり、文部科学省(旧文部省)が小学校における先導的実践研究を開始した平成4年(1992年)より、教科としての英語を導入する可能性のある200X年までの動向を説明した⁴¹。

小学校における英語教育は、従来私立小学校で行われてきた

- | |
|---|
| <p>■ 第1ステージ (1992年より)</p> <p>文部省、研究開発校で先導的な実践研究を開始</p> <p>■ 第2ステージ (2002年より)</p> <p>新学習指導要領</p> <p>「総合的な学習の時間」の新設</p> <p>国際理解教育としての英語活動のスタート</p> <p>■ 第3ステージ (200X年より)</p> <p>教科としての「英語」のスタート</p> |
|---|

図3.2 本講義で説明した日本の小学校英語教育の歴史

³⁷ 船橋、2000年；小学校英語指導者認定協議会編、2004年；松川、2004年。

³⁸ 寺崎、2004年。

³⁹ 文部科学省は、小学校への教科としての英語の導入を検討するなかで、青山学院大学国際政治経済学部・本名信行氏を長とする研究班(研究員は竹下を含む)に対して、近隣諸国の小学校における英語教育事情の調査を依頼するなど、アジア諸国、とりわけ韓国の英語教育を重視している。柳沢の調査は、この流れに沿っており、重要な資料と視点を、本学のみならず、同研究班にも提供するものである。

⁴⁰ 伊村、2003年、233-246頁。

⁴¹ 講義が実施された平成17年年7月8日現在、教科としての英語の小学校への導入に関する文科省の方針は明らかにされていなかった。

が、平成4年（1992年）より文部省が指定する研究開発校で実践的な英語学習の研究が行われてきた。久埜は、本講義の前に、この研究開発校での授業を中心に歴史と授業の方法を一部紹介した。平成10年（1998年）12月文部科学省によって告示された小学校学習指導要領では、科目「総合的な学習の時間」が新設され、この中で国際理解に関する学習が可能となった。実施は平成14年（2002年）度からであり、現在の学生は（平成17年）2005年入学生（本授業実施時に1年生）が中学1年生のときから「総合的な学習の時間」を受講していることになる。本講座は3年生以上に対して開講したものであるため、受講学生は、そもそも「総合的な学習の時間」については、ニュースで聞き知る程度の知識しかないことになる。

このような学生の現状を踏まえると、この歴史の中で、特に「総合的な学習の時間」の説明に多くの時間を割く必要がある。平成11年（1999年）5月に発行された『小学校学習指導要領解説 総則編』によれば、「あくまでも国際理解教育の一環として、中学校の外国語教育の前倒しではなく、児童が外国語に触れたり外国の生活、文化に慣れ親しむような小学校段階にふさわしい体験的な学習を行うようにすることが大切である」と述べられている。このように、文法およびラテニングなどを含む体系的な英語教育を行うことは現段階では許されていないことを理解させる必要があった。

文部科学省が求める「体験的な学習」を可能とする方法は、今まで研究開発校における多くの実践事例に見られる⁴²。学生が将来、教員になることを前提とすれば、このような実践事例を数多く紹介するのも有益である。前回の講義において、久埜が紹介したのは、手製の絵を用いた「ものあてゲーム」であった。一方、学習指導要領改定の議論の当初から、この新設科目「総合的な学習の時間」は、コンピュータや各種IT技術との連携が可能であることが教育工学関係者には注目されており、ITを用いた実践事例も数多く紹介されている⁴³。そのため、本講義では、特にこのITを用いた実践を紹介することに意義があった。しかしながら、「総合的な学習の時間」の意味について言及することが多く、実際にはITによる実践事例を紹介することは時間的にもできなかった。仮に紹介したとしても、日本の事例では、体系的な英語教育をITによってサポートする実践例がないため、韓国における事例を紹介することがもっとも効果的な事例紹介となっていると考えられる。

最後に、わが国における、小学校英語教育導入に関しては賛否両論が多数述べられている⁴⁴

⁴² 三浦編、1994年；吉村、2000年；服部、2002年；渡邊、2003年；子どものしあわせ編集部編、2000年。

⁴³ 伊澤他、2002年、89-92頁；財団法人コンピュータ教育開発センター、

< <http://web2.cec.or.jp/jissenjirei/> >

⁴⁴ 小学校英語指導者認定協議会編、前掲書；松川、前掲書。

が、履修学生にもこの問題を考える機会を与えることを目的とし、これらの両論を提示した。このような議論のため、いまだ教科としての「英語」が設置できず、総合的な学習の時間の中での、外国語の導入という苦肉の策しか取りえていない現状を紹介し、第二部の韓国の小学校英語教育の伏線とした。

3.4.3 講義第二部：韓国の小学校英語教育

講義の第二部では、日本の小学校英語事情をより深く理解するために、他国との比較を行った。本授業では韓国における小学校英語教育の歴史、社会的ニーズ、実際の授業風景、教員の意見を紹介した。

韓国では、すでに平成9年（1997年）より、小学校に必修教科としての英語を導入しているが、ブロードバンド普及率が世界1位であるなど、英語教育のみならず、IT化や情報教育においても日本の一歩先を進んでいる。また、近年のワールドカップや韓流ブームもあり、本講座履修学生の関心の高い国のひとつである。以上の理由から韓国を取り上げて紹介することとした。



図 3.3 韓国 Gumbawi 小学校の3年生の英語の授業風景

柳沢は、本プロジェクトで、ソウルの南西の Siheung 市にある Gumbawi 小学校⁴⁵における英語教育の授業を参観⁴⁶し、許可を得て小学校3年生の英語の授業を動画および静止画で撮影した⁴⁷。授業では、VTR中に字幕などを挿入して編集し3分間にまとめて上映し、その後、インタビュー内容や韓国の英語教育の国策等を紹介した。

韓国での英語教育は、最初は「特別活動の時間」で国際理解として行われていたが、国の決定により平成9年（1997年）より教科としての「英語」が公立小学校に導入された。小学校3年生より授業が始まり、小学校3年生で週1回、4から6年生では週2回ある。韓

⁴⁵ Gumbawi 小学校 < <http://kumbawi.es.kr/>>。生徒数約1800人。Siheung市はソウル市南西、インチョンの南東に位置し、一体は工場地帯である。Gumbawiとは直訳すると黒い岩という意味。

⁴⁶ 参観は平成17年年6月27日、本プロジェクトの予算により実施した。

⁴⁷ 図3.3は、柳沢撮影。生徒の顔が判別できないことを条件に撮影の許可を得ている。

国の小学校の全体の授業は以下のとおりである。

- 1・2年生：5教科：国語、数学、賢い生活、正しい生活、楽しい生活
3～6年生：9教科：国語、数学、社会、科学、体育、音楽、美術、英語、道徳
裁量の時間 2時間／週 <コンピュータ+担任依存（国語・数学）>
特別の時間 1時間／週

英語の授業は、中学校の英語と接続するようにカリキュラムが組まれており、3年生では文字を使わず、4年生になってアルファベットを覚え、文法は中学になってから学ぶ。小学校段階の最終目標は「英語を楽しむこと」であり、6年生終了時に、日常会話はできるようなることを目標にしている。教科としての「英語」を導入することで減った科目や時間数はなく、現在は単純増であるが、将来的には土曜日が休みとなるため、いくつかの科目が減らされる見通しであるという。

原則、全教員がこの教科としての「英語」を教えることができなければならない、小学校のすべての教員に計60時間の英語研修が課せられている。さらにその後、120時間の上級研修があるが、これらの研修にはインセンティブがつくことになっている。どの教員も英語を教えることができないが、実際には、すべての学校に英語専科の教員がおり、3～4年生は担任が「英語」を受け持ち、5～6年生は英語専科の先生が担当している。英語専科教員になるためには、小学校の免許と英語の教員免許の両方が必要となる。ALTは、地域の教育長が決めるが、予算の関係などで実際にはほとんどいない。ALTはビザならびに教員免許が必要であり、大学卒業以上でなければならない。町の英会話スクールの教員などが採用される。

使用する教材は、教科書としては、国定の一冊の教科書とCD-ROMが配布される。カセットテープだった時代もあるが、今ではCD-ROMのみになっている。CD-ROMには各学年、生徒用と教師用がある。CD-ROMはMicrosoft Windowsが搭載されたパソコンによって動作するが、そのパソコンは申請があれば、収入などの審査を経て、国より無償配布される。申請は学校が代行している。実際には現在、ほとんどの家庭にパソコンがあるため、取材した小学校の申請代数は年間4台程度であるという。

クラス編成は学校によっても異なるが、生徒数が1800人のGumbawi小学校では、各学年が5～6クラスで編成され、1クラスあたりの生徒数は40～45人であるため、韓国の全国平均30人からすると多い。教室は、英語専用の教室1室が利用されており、そこに全クラス、移動して行く。英語用の教室のため、壁などには英語に関する各種ポスターや教材が貼られており、また、教卓は英語専科教員専用となっている。教室の教卓には教員のPC

セットがあり、大型の投影型プロジェクターと、一人一台の PC モニターとレスポンスアナライザがある。小学生には PC 操作は不要であるばかりか学習の妨げになるため、モニターしか設置しておらず、教員の PC と同一の画面が映る仕組みになっている。

授業内容は、基本的にはピアジェの理論に基づき、リズム的な要素を多分に取り入れ、毎回リズムや歌を導入している。カリキュラム的には、内容が非常に多い。つまり、教科書の学習内容の分量が多く、結局、やれる内容とすれば基本のみになってしまうという。

このように、韓国の英語教育は、日本の「総合的な学習の時間」における国際理解教育とは大きく異なり、反復学習による体系的語学習得が特徴的であった。本講義では、このような韓国の小学校への英語教育導入の経緯および全教員が指導を担当することを基本とした教員研修に関する説明をし、あわせて一部の韓国国民の英語白熱ぶりを紹介した。

韓国の事例紹介を通じ、日韓の違いを比較することによって、日本のおかれた実情がさらによく学生に理解されたと思われる。また、授業の VTR では、教員が実際に CD-ROM によるマルチメディア教材を利用している様子がわかり、IT を利用した英語教育の方法について多少なりとも知ることができたと思われる。また、VTR 中では、英語専用の教室の設備、壁の張り紙などがわかるため、受講学生に韓国の授業風景が大変よく伝わったと思われる。

3.4.4 ワークショップ：幼児～小学生向けの英語マルチメディアソフト

講義に続くワークショップでは、幼児から小学生向けの英語マルチメディアソフト（以後、ソフトウェアと呼ぶ）の英語学習体験を行った。コンピュータ教室の PC を 16 分割し、それらにあらかじめ 16 種類のソフトウェアをインストールし、すぐに使用できるように準備をしておいた。学生は 1 つのソフトウェアを体験したのち、席を移動し他のソフトウェアを体験した。

表 3.1 に体験用に用意した 16 種類のソフトウェアのデータを掲載した。No.1 から No.8 までは日本で市販されている入手しやすいソフトウェアである。紹介されている実践事例などでは、アメリカ産のソフトウェアや大学と提携して開発した特注ソフトウェアなどもあるが、学生が将来入手しやすいかどうかという観点から、国内のパソコンショップや大型電気店で入手できるものに限定した。No.9 から No.16 は韓国で使用されているソフトウェアで、前述の韓国小学校に参観した折に戴いたものである。

ほとんどのソフトウェアは見るだけで操作が可能であるが、操作に戸惑う可能性も否定できなかったため、簡単な独自の使用マニュアルを作成し、またそのソフトウェアの紹介記事を印刷して各コンピュータ机上に用意した。講義部分が長かったため、ワークショップ全体の時間には、30 分程度しか割くことができなかった。体験中は、後述する「マルチメディア英語学習ソフトの体験シート」にソフトウェアの評価と使用感を書かせた。ソフトウェア

の体験に対する学生の関心は、授業開始時から大変に高かった。多くのソフトを体験させたという教員の期待ははずれ、時間が短かったせいもあり、数少ないソフトウェアだけに熱中していたようである。

表 3.1 ワークショップで使用したソフトウェア

(No.2 と 3 はセット販売, No.1-8 が日本, No.9-16 が韓国のソフトウェア)

No	対象学年	ソフトウェア名	定価
1	3 歳以上	『プーさんののはじめての ABC』	¥2980
2	3 歳以上	『ミッキーのみんなの幼稚園』	¥3980
3	3 歳以上	『プーさんの森の幼稚園』	
4	4 歳以上	『はじめてのえいご絵じてん』	¥4700
5	3 歳～小学生	『スマイルタウン』	¥3045
6	4 歳～小学生	『絵で覚える 英語』	¥3864
7	4 歳～小 6	『えいごだもーん たんごだもーん』	¥3700
8	小学生	『えいご ベイシック フォニックス編』	¥4179
9	韓国 小学校 3 年 生徒用	<i>Elementary School English 3</i>	無料
10	韓国 小学校 3 年 教員用	<i>Elementary School English 3</i>	無料
11	韓国 小学校 4 年 生徒用	<i>Elementary School English 4</i>	無料
12	韓国 小学校 4 年 教員用	<i>Elementary School English 4</i>	無料
13	韓国 小学校 5 年 生徒用	<i>Elementary School English 5</i>	無料
14	韓国 小学校 5 年 教員用	<i>Elementary School English 5</i>	無料
15	韓国 小学校 6 年 生徒用	<i>Elementary School English 6</i>	無料
16	韓国 小学校 6 年 教員用	<i>Elementary School English 6</i>	無料

3.4.5 マルチメディア英語学習ソフトの体験シートの分析

本授業では時間的制約と内容量の比較から、ワークショップでソフトウェアの体験しか行うことができないことがあらかじめわかっていた。そのため、せめて漫然と体験させるだけでなく、考えながら体験させるために、「マルチメディア英語学習ソフトの体験シート」を配布し記入させた。全 16 種類のソフトウェアより最大で 4 つまで選び、そのソフトウェアを 10 段階で点数評価させ、さらに、ソフトウェアの使用感を自由記述させた。有効回答数は 25、各ソフトウェアの平均評価得点は表 3.2 のようになった。体験者数は、ワークショップ時間内にそのソフトウェアを体験した記録が残っている学生数である。評価者数は、10 点満点評価を行った人数である。点数のつけ忘れなどがあるため、両者の人数は一致していない。

データ数が少ないため統計的な言及はできないが、小学生向けのソフトウェアの体験者数が幼稚園生向けよりも多いこと、韓国の生徒向けソフトウェアが比較的高い評価を得ている

ことなどが、表 3.2 から読み取れる。No.7 と No.8 が突出して体験者数が多いのは、これらが優秀な学習ソフトウェアとしていくつかの賞を受賞していることを授業中に紹介したことが原因と考えられる。韓国のソフトウェアの体験者数が少ないのは、インタフェースの一部に韓国語が使われている点や、すでに VTR で画面内容を紹介してしまっていることが理由であると思われる。

表 3.2 各ソフトウェアの体験者数・評価点の平均⁴⁸

No	対象学年	ソフト名	体験者数	評価人数	評価点
1	3 歳以上	『プーさんのはじめての ABC』	8	7	7.71
2	3 歳以上	『ミッキーのみんなの幼稚園』	6	5	7.30
3	3 歳以上	『プーさんの森の幼稚園』	8	5	7.80
4	4 歳以上	『はじめてのえいご絵じてん』	8	5	7.16
5	3 歳～小学生	『スマイルタウン』	9	9	6.56
6	4 歳～小学生	『絵で覚える 英語』	3	3	7.33
7	4 歳～小 6	『えいごだもーん たんごだもーん』	13	11	7.68
8	小学生	『えいご ベイシック フォニックス編』	14	12	6.54
9	韓国小学校 3 年生徒用	<i>Elementary School English 3</i>	3	2	8.50
11	韓国小学校 4 年生徒用	<i>Elementary School English 4</i>	3	3	8.50
12	韓国小学校 4 年教師用	<i>Elementary School English 4</i>	2	2	6.00

体験者数は若干であったものの、韓国の 2 種のソフトウェアが評価点の平均 8.50 を得た理由は、日本製品と異なり、授業で使用することを想定し、音楽を使った体験学習のための工夫が豊富であったからであると考えられる。以下に、このソフトを体験した学生が表した使用感を提示する。

ゲームのように進んでいくソフトだったので、達成感もあるし、どんどん先に進みやすいと思う。点数もつくので、低かったらもう一度やりたいたいと思って良いソフトなのではないかと思う / VTR で使っていたのと同じやつようだった。リズムがすごく良いと思うけど、いまいちよく意味が分からなかった / テンポの良い音楽に、英語の歌とアニメーションがついていて面白かった。ハングルが何を意味するかは分からなかったけど……。一緒に歌いたくなった / 1 つの表現でも、何通りか（歌とかマンガ？とか）あって何度も何度もできるので、飽きないし、すぐ覚えられるような感じがする / 体で英語のリズムを覚えられ、また簡単な映像で日常で使え

⁴⁸ No.10,13 - 16 は体験者数 0 のためデータを省略した。

る会話表現を勉強できるので小学生でも効果的に学べると思った。これが無料とは驚きです / ハンゲルで知らない間に終わらせてしまったが、慣れてみると分かりやすかった。リズムに乗って覚えられそう

3.4.6 授業改善と考察

講義とワークショップ終了後、一部の学生より授業改善・提案に関する意見を収集した。表 3.3 に本授業に特に関係のある内容を抽出した。主に①授業風景を見ることに関する意見・提案、②講義とワークショップの連携に関する意見・提案、③小学校英語に関する意見・提案の 3 つが挙げられた。

表 3.3 選択英語Ⅳ「子どもたちと英語」受講後の授業改善・提案の例

①授業風景を見ることに関する意見・提案
英語の授業を扱っている小学校の英語の授業を見学するような機会がほしい。
講義やワークショップでこういうものだよと教えられても想像がしづらいため、もっと子どもの英語教育の現場を見たかった。
実際に英語教育が幼稚園や小学校で行われている様子を VTR などで見たい。
②講義とワークショップの連携に関する意見・提案
講義とワークショップに分かれているため、講義で学んだことがすぐにワークショップにつながり、一貫性があるといい。
講義は日本語でもいいと思うが、ワークショップはすべて英語で授業を行なってもよい。実際に子どもが英語を習う場合日本語は話さないようなので、それと同じ状態を作るのはどうか。
③小学校英語に関する意見・提案
小学校英語の歴史をもっと詳しく、最初の回にやった方が、その他の回の理解が深まるのではないかな。

本授業では、韓国の事例紹介のみで 3 分間の VTR を見せている。字幕による補助的解説や静止画も多く取り入れたため、授業風景が十分に理解可能であったと考えている。しかし、日本国内の事例に関しては、授業時間の制約もあり、文字やホームページベースの紹介しか行うことができなかったため、小学校現場で実践されている様子、特に IT を利用した英語教育の実際が、履修学生には理解できなかったと思われる。今後、授業参観の機会を設けられれば理想であるが、せめて筆者らが参観した VTR を紹介することが必要であると思われる。

本授業では講義内容とワークショップが直結していなかったことが反省点として挙げられる。また、その中で学生が学び取るべき内容が多すぎたように思われる。まず、講義とワークショップを 2 回に分けて行なえば、小学校英語教育導入の賛否を学生同士が議論するこ

とでより深い理解につながるであろう。また、今回の英語学習ソフトの紹介は単なる体験に終始した。授業における活用方法およびマルチメディアソフトの特性の活用法に関する指導を、体験前後に行う必要性があると思われる。

IT との関連では、総合的な学習の時間に、数多くの IT 機器を使用して英語指導を実践している事例が数多く報告されている。しかしながら、本授業では、IT 機器の利用に関しては韓国での事例を紹介したにとどまり、英語教育サポーターあるいは英語教員の育成を意識した本プロジェクトの目的からすると、量的にも質的にも不十分であった。幼児・児童のための英語教育を考えるに当たり、ソフトウェアのみならずハードウェアも含めた IT 機器利用の事例紹介と実際の活用等に関わる講義と体験が可能となるような授業展開を工夫する必要があるだろう。

3.5 子どもへの英語指導と異文化理解

3.5.1 子どもへの英語指導における異文化理解

「異文化」は、子どもたちを対象にした英語教育においても頻繁に話題となり、その扱いについても多数の意見がある。時に、「異文化交流」が、「外国文化との交流」、「国際交流」と同義に扱われ、「異文化理解」すなわち「国際理解」と解釈されることさえある。「理解」については、外国の生活や文化を知る「国際理解」、自分と共に身近な人を理解し、受け入れ、尊重しあう意味での「異文化理解」、自分の国や生活習慣、文化について再認識する「自文化理解」などの扱いである⁴⁹。講座の履修学生も、異文化に対するさまざまな解釈や感覚を持ちながら、事前の準備なしに一定の時間を共有し、異文化理解をテーマにした授業を受講した。本項では、未体験のテーマと授業形態を学生がどのように受け止め、異文化体験を実践演習にいかに関与させることができたかを報告し、英語を専科としない学生の子どもを対象にした英語教育における異文化理解教育指導の可能性を模索する。さらに、子どもを対象にした異文化理解教育の必要性を論じる。

3.5.2 異文化理解に関する授業の展開

通常、異文化理解トレーニングを授業の一環として実施する場合、限られた時間の中で、個々の活動を効果的に実施しするのみならず、各活動への意味づけと、受講生の内面の変化への説明を確実にこなす必要がある。従って、本講座では、まず、理論的枠組みの提示⁵⁰、

⁴⁹ アルク『kids com』、2001年2月号14頁「国際理解の6つの方法」を参考にした。

⁵⁰ 鈴木有香作成資料、「文化とは」を用いて異文化理解の定義と特徴を示した。

自分を知るための活動⁵¹、異文化理解シミュレーション（疑似体験学習）⁵²、振り返りのディスカッション⁵³を1日目の授業とした。さらに、2回目の授業では、第1回の授業内で交わされた意見と学生からのフィードバックを教材とし⁵⁴、グループ活動、情報の交流、実践演習⁵⁵を組み合わせ実施した。以下にその授業の報告をする。

A. 第1回授業：異文化体験シミュレーションの実施とその効果

a. 授業の流れ

1. 「異文化理解の4段階アプローチ」〈気づき→知識→感情→スキル（行動）〉
2. 「クラスのことを知ろう！！」
3. 「文化とは？」文化の一定義⁵⁶と3つの条件⁵⁷
4. 文化の島モデル（Carter, 1997）⁵⁸
5. 異文化体験シミュレーション（疑似体験学習）実施
6. 振り返りのディスカッション

b. 異文化の存在の気づきと異文化理解

異文化の存在に①気づき、②知識を持ち、③感情を分析し、④行動に移すためのスキルを

⁵¹ 演習「クラスのことを知ろう！！」を実施。各項目の該当者を探す活動。インタビューを通じ、他者の判断基準の中にある常識、価値観について理解し、更に自己の判断基準とする常識の不確かさや価値観に気づき、分析した。

⁵² 今回は、文化背景の異なる2つの文化が遭遇することで発生するコミュニケーションや、相互理解の上の問題を体験を通じ、より良い人間関係を構築するためのスキルを修得することを目的としたシミュレーションを実施した。前半は、架空の文化人（バルーンバ人）を、その文化への訪問者（自分の文化をそのまま使う）が、あらかじめ用意した質問を使いインタビューをしていく。後半は、インタビュー活動中に双方が感じた様々な感情や、不思議な体験を振り返りとディスカッションで分析していくものである。通常、全体で2時間程度を要するが、今回は時間の関係で後半のディスカッションを2回の授業にわたって実施した。

⁵³ 質問シート「振り返りのディスカッション」を使用した。

⁵⁴ 第1回目の授業内に使用した「振り返りのディスカッション」を収集し、教材として使用した。

⁵⁵ 5冊の絵本を使用し、各絵本の中における（異）文化の扱われ方を探り、その活用法を演習として実施した。

⁵⁶ 定義として「知識、進歩、技術、道徳、慣習、その他人が社会の一員として獲得した一切の能力や習慣を含む複合体」（Tylor, 1958）を紹介した。

⁵⁷ 紹介した3つの条件とは1. 我々が学習、習得するもの、2. ある集団に共有されているもの、3. 次世代に伝達されるもの、そして、一度身につくと簡単に変更できないもの。

⁵⁸ 文化には目に見える部分と見えない部分が存在し、見えない部分がとても大きく、重要であること、更に、見えない底の方でつながっていることで、努力により理解は可能であることを資料で説明。

習得するための「異文化理解の4段階アプローチ」を紹介したのち、最初の演習として、担当教員作成の「クラスみんなを知ろう!!」において、学生間の情報収集活動を実施した。収集活動後、例えば、「常識」ということばがコミュニケーション時にどのように作用するか、判断基準としての「常識」の不確かさや曖昧さを討議した⁵⁹。授業では、学生から出た「正しい・間違っている」「良い・悪い」「好き・嫌い」「世間」常識「当たり前」「普通」「基準」「固定観念」「先入観」「無意識」「何気なく」などのキーワードについて討議を進めた。学生は、それまで気にかけることなく使っていたことばの意味や活動の性質を再確認することの必要性を体感した。

討議後、「文化」の定義と「文化の島モデル」の説明を経て、シミュレーション（疑似体験学習）を実施した。その後の振り返りのディスカッションと、提出物の中から以下に、特徴的な気づきを紹介し、学生の視点の変化を分析する。

気づきとして：見える文化・見えない文化が存在する / 誠意がいつも通用するとは限らない / 考え方や価値観などの目に見えない文化の存在 / 「自分の文化」を見直す必要性 / 異文化を理解することの難しさとの必要性 / 正しく伝えること、コミュニケーションの難しさ / 違って見えても根本は同じ / 根底にあるもの、共通するものを共有することが大切 / 知らないこと・違うことは訊きづらい / わからないこと・初めてのことに会うと不快感・疑惑・孤独感・嫌悪感が生まれる / 変えることは難しい / 「前に進む」ことが大事、でも大変 / 集団の枠から出たり、これまでのやり方を変更するのは難しいし、怖い / 異文化と自文化をあまり意識していなかった / 自文化のルールを相手に当てはめてしまう / 少しの知識や自分たちのルールだけでは、自分たちと違うことには役立たない / 根拠は結構曖昧なもの / コミュニケーションで分かり合うもの・分かり合えないものがある / 根底でつながっていることを知って安心 / 違う文化の人たちの目を通すと物事が違ってくる

多くの学生が、シミュレーションを通じ、異文化理解の困難さや摩擦が生じた場合の解決の難しさ、価値観の違いとその根底の深さに気づき、考える機会となったことを認識している。「異文化の存在に気づく」という本授業の主題はもちろん、「理屈では説明できない感情」

⁵⁹ 樋口は「常識」とは「文化内、グループ内で共有されているもの」と定義し、「文化背景が異なる人々の間では、常識が非常識になる逆転現象が起きる」と述べ、さらに日常の些細なことならば「習慣」や「価値観」の相違で済まされるかもしれないが、価値観や信念が大きく異なる場合には重大な摩擦を引き起こすことがありえると述べている。樋口容視子「異文化コミュニケーションとは」八代他著、2001年、10頁。

の存在や、異文化間の理解の難しさも学んでいる。講義や情報調べだけでは得られない多くのことを、短時間のうちに体験から学んでいることが明らかであり、よって、インタビュー活動や、シミュレーション（疑似体験学習）という体験学習形態が、学生たちに効果的であったといえる。振り返りのディスカッションでは、体験直後の衝撃や納まらぬ感情を率直に口にし、自己分析を進める学生の姿があり、活発な議論が進められた。

c. 語学指導と異文化指導の関連性

時間の節約により、授業内ディスカッションでは触れることはできなかったが、「語学を教えることと、異文化を教えることの関連性」⁶⁰について記述させた。そこにも、体験学習を経た後であるからこそ寄せられた意見が多くある。以下に、その一部を紹介する。

語学を教えることと、異文化を教えることの関連性：言語は文化の一部 / 言語自体が文化 / 異文化の人とコミュニケーションをとる方法としてその言語を学ぶことは必要 / 自分の気持ちや考え方、価値観などを表現するために言語は不可欠 / 異文化を知ることによって語学習得への興味や理解が深まる / 新しい言語を学習する時にも、新しい文化を学習する時にも柔軟性が必要 / 共通点として、視野が広がり、多くの人と関わることができる / 言葉だけが完璧でも相手の理解は無理

英語教育と異文化理解の関連性については、特に公立小学校の英語活動において、英語を学ぶ目的は、あくまで国際理解であり、英語は国際理解の一要素として捉えるべきであるか、英語を学ぶ目的はあくまで言語習得にあると捉えるべきかの議論がある⁶¹。学生の反応には、いずれかの意見への偏りは見られず、異文化理解のための使用言語に関する記述もない。むしろ、言語それ自体の異文化性に関する記述が目立つ。英語を通して、異文化を紹介すること自体が異文化理解に効果的であるというものが多い。異文化理解と言語習得の共通性を見つけた学生のことばを借りて、その2つの共通性を表現すると「違う文化（言語）が存在することを理解しあい、上手いこと出くわす（習得する）と、新しく、更にすばらしい文化（言語活動）が生まれる可能性がある」ということである。

⁶⁰「振り返りディスカッション」内の質問の1つである。

⁶¹これについては、小学校の英語教育関連書籍において様々な議論が続いている。どちらに視点を置くかにより、英語レッスンを通して異文化を紹介するべきか、英語レッスンとは別に日本語で異文化研修を実施するべきか、主張が異なるため、結論が出ていないのが現状である。

d. 英語教育における異文化理解教育の指導

学生の意見を以下に記す。

英語教育における異文化の指導について：英語を身近に感じさせるために、その文化に興味を持たせる / 英語が使われている国、英語圏の文化の紹介 / 英語と異文化はセットで教える / 異文化体験をさせることは効果的で大切 / 教える側の誤解 / 固定概念や偏見が入らないように / 異文化に触れながら / 世界の食べ物、ゲーム、歌、絵本、衣服の違い、挨拶などで英語表現の違いの紹介などで / 何か目に見える形で少しずつ / 文化の違いを楽しめる方法で / 共通のものを発見し、親しみやすさを感じさせる / 英語を使って / 自分たちの文化を見直すところから入っていく

上記には、英語指導方法を現場で模索している小学校の教員が同様の異文化研修を受講すると起こりうる反応を彷彿とさせるものがある。学生と小学校の教員には、英語を専門とはしないが、子どもと国際理解教育への熱心な思いと興味を持つという共通点がある。学生からの自由な発想による意見や指導方法の提示から、今回の体験学習とそれに伴う授業は、語学を専門としない小学校教員への異文化理解教育の一形態として、大いに効果を期待できると考える。

児童英語教育、国際理解教育で異文化理解を担当する指導者に求められる重要な要素のひとつが、異文化を理解し受け入れる柔軟性である。児童英語教育における異文化の扱いの指針が示されていない現在、どのような教育担当者に、どのような異文化理解教育や指導方法を習得させるべきかという問いに対する明確な答えはなく、英語を専科としない本学生のような対象者への異文化理解教育の内容やその方法については議論さえされていない。そこで、具体的で実践的な指導法取得を目的とした研修履修以前に受講する「英語を専科としない英語指導者向けの研修」として、異文化理解のための体験学習は大変効果的なものであると考え、提案する。

B. 第2回授業：異文化理解と英語指導の融合

a. 異文化体験シミュレーション後の振り返りのディスカッション

疑似体験後の振り返りの時間が不十分であったという危惧と、初回の授業に参加できず、疑似体験学習なしで2回目授業のみを受講する学生のために、学生の記述をもとにした資料⁶²を

⁶² 初回授業後提出の振り返りシートの学生の声を、大部分は原文のまま、一部は要約の形で作成。自らの意見を振り返るばかりでなく、他の学生がどのように異文化体験を理解したかを知る手段とした。

作成し、教材とした⁶³。理解度を探るために、振り返りのディスカッションで実施した質問と同様の質問も再実施し、授業後に回収した。

授業では、まず、前回紹介された文化についての定義と、異文化理解のための基礎知識⁶⁴を再確認した。「気づき・理解」の段階から、行動に移すための「知識とスキル」に移行する方策として、収集した抜粋文を読み、異文化理解学習の難しさと大切さについて討議した。他学生の意見を尊重しながらも、自分なりの異文化理解を再確認し、価値観の違いや自文化中心主義⁶⁵が容易に発生すること、理解し合うには工夫やエネルギーが必要であるが、それは不可能ではないことなどを話題にすることができた。学生たちの記述には、違いを発見したことに対する新鮮な驚きが表れていたと同時に、共通性を発見したことによる安心感も示されていた。発言や記述にみられた学生の「異文化感」「世界観（感）」は多様、柔軟、そして積極的であった。学生が偏った見解や結論を示さなかったことは、本講座の目的が学生たちに偏りなく伝わった結果である。

b. 異文化理解：絵本⁶⁶の中の異文化を探る

英語教育における異文化の指導の実践演習として、絵本の中の異文化の扱いを学ぶために、絵本を使って異文化を紹介する課題に取り組んだ⁶⁷。実際に絵本⁶⁸を手にし、異文化の視点で内容を探り、英語指導方法をグループで検討した。学生の意見は以下のとおり、①絵本の特徴を生かした提案、②外国と日本の比較の提案、③教えるときの留意点、の3種類に分けられる。

- ① 絵本の特徴を生かす：絵の中にあることと、自分の身の回りのことの比較 / 主人公と自分の違いを考えてみる / （絵本の主人公の）一日と自分の生活を比較 / 視覚から学ぶ / 英

⁶³ 7月1日回収の＜振り返りのディスカッション＞の内容を教材として使用した理由として、その記述の中で、①アクティビティやシミュレーションによって、学生たちが予想をはるかに超えた生き生きとした、率直な意見を述べていることが判明した、②学生の記述の中にある様々な見解、感想を原文のまま伝えることで、新たな気づきがあることを期待した、③各学生の声をクラス全体で分かち合い、活発で積極的なディスカッションは有効な情報交換であることを体験して欲しかったこと、の3点であった。

⁶⁴ 「文化とは」他。

⁶⁵ 自文化（自民族、自国民）中心主義（ethnocentrism）。

⁶⁶ 英語を教える環境で使用する絵本として、ここでは、本文中に英語のみを使用した絵本に限定する。

⁶⁷ 学生たちのコメントは、振り返りのシミュレーション、課題シート内記述より抜粋。

⁶⁸ 使用絵本：David Shannon, 2001, *David Gets in Trouble*, New York: The Blue Sky Press; Andrea Zimmerman & David Clemesha, 1999, *Trashy Town*, London: Harper Collins Publishers UK; Leo Lionni, 1975, *A Color of His Own*, New York: Alfred A. Knopf; Selby B. Beeler, 1998, *Throw Your Tooth on the Roof*, Boston: Houghton Mifflin Company; Ifeoma Onyefulu, 1997, *A is for AFRICA*, London: Frances Lincoln Publishers.

語版と日本語版を交互に読み聞かせる / 異文化の中にいる感覚になる

- ② 「外国」という視点：日本と対象国との違い比較 / 親しみやすい絵本で興味を持たせ、そこから他の国のこと、その人々などへ広げる / 様々な国があり、それぞれ特有の文化があるということ
- ③ 教えるときの留意点：子どもたちと一緒に / 子どもたちの視点に立つ / 身近な話題を通して / 実際にそれ（違ったやりかた）を表現してみる / ゲーム感覚で違いを見つけさせ、興味を持たせられるように工夫 / 子どもたちが疑問に思ったときに / 違うということばかりでなく共通点も / 英語そのものも活用 / アルファベットを学ぶために単語を使うのではなく、絵本の中の異文化を体験するための言葉を使う / 異文化での孤独感の中で、仲間を見つけたときの安心感など / 染まりすぎて自分を失うと、寂しく感じる事がわかる

グループ活動として、「絵本の中の異文化」という視点から絵本を分析し、その絵本と異文化の扱い方をクラスに紹介した。英語の絵本の読み聞かせは実習済みであったが、異文化という視点を意識させたため、指導経験のない学生たちにとっては難しさが増加した様子であった。授業内では自由な発想の指導方法が発表される場面はなかった。しかし、この授業後に記述された、上記の内容の随所に、絵本を使った実践演習による影響が現れている。絵本の中の言葉への言及がない反面、絵本の中の文化と実生活との内容や視覚的な比較を提案しているものなど、具体的で現実的な指導方法が多い。

「子どもへの異文化理解教育」については、疑似体験学習直後に記述されたものには、「自分自身の感動を子どもにも体験させてやりたい」という「思い」の発言が目立った。自分たち（大人）でさえこれだけ影響を受け、大きく何かを感じられたのだから、もっと柔軟な子どもたちなら、もっと効果があるのではないかというものである。同時に、「刺激が強すぎるかもしれない」という懸念を含めた感想もあった。一方、2回目の異文化理解授業で、再度、異文化理解の大切さを確認し、具体的な教材（絵本）を手にした後に書かれたものには、「教えるのではなく」「強制ではなく」「型にはめようとしない」という提案がされ、絵などの視覚教材の使用を提案しているものが多い。そこには、刺激の強さや難しさへの不安や懸念はない。分りやすく伝えることの大切さを指摘し、子どもには五感を意識した伝達方法が適していること、分りやすさや楽しさが大事であり、興味を持たせ継続することの重要さも強調している。異文化を小さい頃から体験することが効果的であるという意見も多い。相違点と共通点を等しく観察する重要性を伝えるべきであるという意見もあった。残念ながら現段階では、効果的伝達方法や具体的指導案は見当たらない。

3.5.3 総括と今後への課題：

授業では、学生たちの異文化理解トレーニング体験に焦点をおき授業を進めざるを得なかったため、「子どもにとっての異文化」とその体験学習効果についての分析には至らなかった。学生から「日本の文化もまだ良く分っていないかもしれない。海を越えると文化の違う生活をしている人たちがいることも知らないかもしれない」というように、異文化が子どもにどのように見えるものなのかという意見が出始め、児童英語指導者に求められる「子どもの視点に立つこと」を実践し始めたところで講義が終了した。その他にも、「個」の存在にも気づいていない子どもたちによる「文化」の存在が持つ意味への疑問を初めとして、「子どもにとっての外国は、私たち大人にとっての外国とは違うのかもしれない」「違うということは、自分の文化と違うということではなく、単に、自分と違うということかもしれない」などの疑問が出てきたところである。

鈴木（1997）は、自我の発達を「2歳から4歳ころに、幼児は自己主張を始めたり、反抗するようになる。（中略）児童期に入ると自分と他人との分化は更に深まっていく。小学校への入学によって、知識が増大したり、興味や関心が広がっていく中で、自我はますます拡大していく」⁶⁹と解説している。自我の目覚めから自己と他者の分化へと移行するこの時期は、まさに本プロジェクトの対象年齢層と重なり、異文化への目覚めの時期でもある。八代（2001）は、異文化コミュニケーションは、文化背景の異なる人への開かれた心と態度とコミュニケーション活動への積極的な参加行動を基礎とするものであり、これらの態度と行動力を幼い頃から養うことが大切であるため、現在、国際理解とコミュニケーションが学校教育の場で積極的に行われている⁷⁰と述べ、幼年期からの異文化理解教育の重要性を提唱している。本講座により異文化理解教育の必要性を体感し、子どもと異文化、異文化理解教育と英語教育の関連性を模索し始めた学生が、英語指導者としての幼児期から児童期の英語教育における異文化理解教育の位置づけと、その最適な方法の模索する、応用の段階まで進むことは、本プロジェクトの実践的な成果を確認できるひとつの方法であると考えられる。

4. 結論

平成17年10月14日、NHKは「文部科学省が中央教育審議会の外国語部会に対して、早ければ平成19年度より、小学校3年生以上に対して、英語を必修とする方針を提示した」と報道した⁷¹。本プロジェクト担当者が、プロジェクトの一環である選択英語Ⅵ「子どもた

⁶⁹ 鈴木、1997年、81頁。

⁷⁰ 八代他、2001年、3頁。

⁷¹ 文部科学省による公式発表ではない。

ちと英語」の講義を終了し、次年度に向け、本講座の内容を改良・発展させるための検討に取りかかろうとしていた矢先のことであった。この方向性が具体性を帯びれば、小学生のための英語教員の養成が何よりも緊急の課題であることが明白である。この課題に取り組むに当たり、本プロジェクトは非常に重要な検討材料を提供することに対する一助となる。

まず、幼児のための英語指導のあり方を考える際に重要なことは、児童・生徒への指導の場合にも増して、教員は指導の対象である子どもに対する理解を有していなければならない。対象が極めて発育途上にあり、精神の安定状態・理解度・関心度など、さまざまな要因において、児童・生徒よりも不安定であることが予測されるからである。そのため、単一かつ固定的な教授法やそれを記した指導マニュアルのみをもって対応することの不備が明白であり、それが、仮に中学校や高等学校における優秀な英語指導者を充てることが万能ではないことの所以である。その意味で、本プロジェクトに関わったさまざまな背景を持つ学生による幼児の英語指導への関わりが重要な意味を持つことになる。

生活そのものが学びであるような幼い子どもにとって、英語の指導もまた、閉ざされた教室における机上の学びではなく、自然な生活環境における学びとなることに配慮することが必要である。従って、英語の絵本を教材に用いる試みは、その配慮の具体化である。子どもにとって大変に魅力的である絵本は、ある意味では教科書として用いられるものではあるが、同時に、おとなと子どもが共に関わり、一時的に共に身を置くことのできる特別な世界であり、自然な「教育環境」そのものでもある。絵本を用いた英語指導を行う者には、語りやめくりの技術と同時に、前述のとおり、子どもという存在に対する深い理解が必要であるため、指導者には高い資質と念入りの訓練が求められる。

自然な「教育環境」の提供という意味では、動き回るのが当然の子どもにとって、身体運動を伴う英語指導の適切さも明白である。日本語として一般的に使われているスポーツに関する用語には、実は英語に由来することばが多く含まれていることは上述のとおりであり、身体運動と英語の親和性が認められる。これらのことばをきっかけとして、ゲームなどを含む、身体を動かす際の指示に英語を入れ込むことは、大変に自然なことと考えられる。幼児や児童を対象とするスポーツの指導者が適切な英語指導力を備えることにより、必ずしも教科としての英語指導に限らない、幅の広い英語学習環境を整えることが可能である。

さらに、小学生に対する情報教育の環境が整いつつある今日、いくつかの意味で、コンピュータを用いた英語指導の意義は大きい。まず、コンピュータのソフトウェアを活用することにより、英語学習と情報教育の相乗効果が期待されるのみならず、個別の学習環境を提供することができるという点で、児童の進度や関心に合った教材の提供が可能である。また、小学生のための英語教員養成は今後の重要な課題であり、その進展を語るには時期尚早であろうが、同様な課題を抱える近隣諸国の事例に学ぶことができるとおり、コンピュータを用

いた英語指導は、当面予測される教員不足の問題を解消するための有効な方策となると考えられる。さらに、語学学習に限らず、21 世紀の子どもたちの学習に大きく寄与すると期待されるコンピュータを用いた学習は、教員による指導の効果をさらに高めるものとして、活用が奨励されるものでもある。

平成 15 年 3 月、『『英語が使える日本人』の育成のための行動計画の策定について』の中で、遠山敦子文部科学大臣は、次のとおり述べ、子どもに対する英語教育の一層の充実の必要性を訴えた。

… 英語は、母語の異なる人々の間をつなぐ国際的共通語として最も中心的な役割を果たしており、子どもたちが 21 世紀を生き抜くためには、国際的共通語としての英語のコミュニケーション能力を身に付けることが不可欠です。また、このことは、我が国が世界とつながり、世界から理解、信頼され、国際的なプレゼンスを高め、一層発展していくためにも極めて重要な課題です。⁷²

子どもたちが身につけるべき英語力とはすなわち「国際的共通語」である英語による「コミュニケーション能力」であり、それが日本人と世界の人々との相互理解の手段となるという解釈は、現在の世界における英語の役割との関わりにおいて、妥当であると考えられる。それならば、英語の指導者と学習者の双方に、異文化に対する鋭い感性と理解力が必要であることは疑いもない。日常的に異文化的・多文化的な環境にあるとはいえない多くの日本の英語学習者にとって、異文化トレーニングの必要性は高く、これを受けた場合の効果への期待もまた高いといえよう。

平成 17 年 10 月 6 日、内閣府の「学校制度に関する保護者アンケート調査」が公表され、保護者が特に公立学校とその教員に対して、依然として不満を抱いていることが明らかになった⁷³。教員に対する不満の一番の理由は、指導力不足（69.7 %）であり、責任感の欠如（48.6 %）や社会常識の欠如（42.2 %）などが目立つ。教員に指導力が不足しており、責任感と社会常識が欠如しているとすれば、日本が国際社会の理解と信頼を得ることにより、国際的なプレゼンスを高め、一層発展することをめざすという任務を負うべき 21 世紀の小学生の英語教育を託すことがいかに困難を伴うことであるか、推し量られる。英語教育の低年齢化を推進するならば、新たな教員の養成と現職の教員の再教育が、今後、緊急の課題であることは明白である。そして、どのような資質の教員が、どのようなアプローチを持って、

⁷² 文部科学省ホームページ『『英語が使える日本人』の育成のための行動計画の策定について』

< http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/15/03/030318a.htm > 2005 年 10 月 16 日入手。

⁷³ 日本経済新聞、2005 年 10 月 10 日、朝刊。

どのような英語力の習得をめざして、子どもたちに英語指導を行うべきであるか、多角的かつ柔軟に検討する必要があるだろう。

子どもという英語学習者の特性から、彼らに適した英語学習とは、一方向からの専門的な指導というよりは、総合的かつ自然なアプローチであろう。本プロジェクトの担当者の専門分野の多様性の理由も、そのようなアプローチの模索であった。総合的と呼ぶには不足が多いプロジェクトではあるが、たとえば英文科・英語学科の学生でなくとも、子どもを対象とした英語指導に関与する可能性を充分に感じ取ることができたのみならず、総合的なアプローチをめざすほど、「英語の専門家」以外の指導者の協力が有効であるとの方向性を示すこともできた。今後、国の方針でも明らかにされた、英語教育の低年齢化の時代に向け、子どもを取り巻く環境のさまざまな局面において、本プロジェクトの主旨がより鮮明になり、これに関わった学生による将来的な教育現場およびそれを取り巻く社会環境における貢献を期待することができると確信している。

参考文献

アルク『kids com』2001年2月号。

伊澤久美、伊藤博康、大久保昇『英語教育における三者間相互作用学習システムの実践と評価』、全日本教育工学協議会全国大会研究発表論文集、2002年。

伊村元道『日本の英語教育 200 年』大修館書店、2003 年。

金森強『英語力幻想』アルク、2004 年。

金森強編『小学校の英語教育―指導者に求められる理論と実践』アルク、2003 年。

子どものしあわせ編集部編『どうする？国際理解教育と英語をむすぶ 小学校の英語』草土文化、2000 年。

財団法人コンピュータ教育開発センター『100校&Eスクエアプロジェクト授業実践事例 検索システム』<<http://web2.cec.or.jp/jissenjirei/>>

小学校英語指導者認定協議会編『どうなる小学校英語「必修化」のゆくえ』アルク、2004 年。

鈴木和代『異文化遭遇の心理学』プレーン出版、1997 年。

寺崎千秋『小学校学習指導要領改訂の解説と展開』明治図書、2004 年。

中島和子『バイリンガル教育の方法』アルク、1998 年。

中山兼芳編『児童英語教育を学ぶ人のために』世界思想社、2001 年。

服部孝彦、吉澤寿一『英語を使った「総合的学習の時間」―小学校の授業実践』大修館書店、2002 年。

『フィジーク』10月号、サニーサイドアップ、1995 年。

船橋洋一『あえて英語公用語論』文藝春秋、2000年。

本名信行他『異文化理解とコミュニケーション2』三修社、1994年。

正高信男『子どもはことばをからだで覚える ― メロディから意味の世界へ』中央公論新書、2001年。

松居直『絵本のよろこび』NHK 人間講座 テキスト 2002年。

松川禮子『小学校に英語がやってきた!』アプリコット、1997年。

松川禮子『明日の小学校英語教育を拓く』アプリコット、2004年。

三浦健治編『小学校 国際理解教育の進め方 ― 新しい学力観をふまえて』教育出版、1994年。

文部科学省ホームページ『「英語が使える日本人」の育成のための行動計画の策定について」

< http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/15/03/030318a.htm >

文部科学省『「英語が使える日本人」の育成のためのフォーラム 2005 ― 変化する英語教育（教室英語から世界で使える英語へ）』、2005年3月。

文部科学省ホームページ『小学校学習指導要領』

< http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/youryou/main4_a2.htm >

八代京子他『異文化コミュニケーション・ワークブック』三修社、2001年。

横浜市教育委員会発行『地域と学校の連携ハンドブック（ボランティア用）― 地域の子どもを育てよう！学校支援ボランティアと教職員が力を合わせて』

< http://www.city.yokohama.jp/me/kyoiku/topics/pdf/160428_1.pdf >

吉村峰子『公立小学校でやってみよう！「総合的な学習の時間」にすすめる国際理解教育英語』草土文化、2000年。

渡邊時夫『英語が使える日本人の育成 ― MERRIER Approach のすすめ』三省堂、2003年。

Carter, J. “The Island Model of Intercultural Communication,” *SIETAR Japan Newsletter*, July 1997.

Tylor, E. B., 1958, *Primitive Culture*. (2 vols.) New York: Harper Torchbooks. (orig. 1971. London: John Murray); 比屋根安定訳『原始文化』誠信書房、1962年。

A Study of Teaching English to Children: In Pursuit of an Active and Professional Approach by Non-English Major College Students

Takeshita Yuko, Murakami Tetsuro, Yanagisawa Masayoshi,
Mori Mari and Suzuki Natsumi

The concern of this paper is to clarify a joint research project conducted in 2005 at Toyo Eiwa University, whose purpose was mainly to explore ways to instruct Toyo Eiwa students to teach English to children in a significant and effective way. In 2002, the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology (MEXT) introduced in the nation's public elementary schools the "Period of Integrated Study," in which they could conduct English-related activities for the purpose of promoting international understanding. In the following year, the MEXT established an Action Plan to "Cultivate Japanese with English Abilities," one of whose focuses is to support and enhance English conversation activities in elementary schools. Therefore, teaching English to children, both preschoolers and schoolchildren, have been attracting much attention of teachers and educators, not to mention the parents.

Such being the case, several faculty members with different academic backgrounds set up a joint research project in order to investigate into good ways for our students to contribute to meeting the needs of the society; even though they do not major in English, they can support those teachers in kindergarten and elementary school as undergraduates, and will be able to do so in the future at different stages of their life. The joint research actually aimed at serving a double purpose; for the faculty to search for a didactics of training especially Toyo Eiwa students to teach English to small children in various approaches, and for these students to receive training in teaching English to children with heightening their awareness of the meaning of international understanding. We have made full use of the research results in an elective English course, "Children and English," which was first introduced in our curriculum in 2005, by taking turns to interact with the students as instructors as well as co-learners.